時流地流

「観光ごっこ」のミュージカル

◆平安時代中期に朝敵として征伐された関東の豪族、平将門。千葉県我孫子市東部の日秀（ひびり）地区には1000年以上前からの将門信仰が残る。成田不動尊が将門の調伏を祈ったとの理由で、土地の人は成田山への参詣はご法度。要職だった人が成田市の団体視察の際、腹痛と称してお参りしなかった話さえある。

◆将門を題材にした創作ミュージカルが昨秋、出生伝説を持つ千葉県東金市で上演された。楽曲を作ったプロをのぞけば、すべて市民による町おこしのイベントだ。故郷の村を救う少年将門の物語。東京・大手町の首塚に代表される「怨霊」や「たたり」のイメージ像とは違う脚本に仕上げた。

◆小中学生を含めて出演者は30人余。ダンス教室の女性講師が主役を演じ、市の女性職員や寺の住職らが脇を固めるミュージカルが今春、福島県内で一日公演の運びとなった。東京の団体を介した東日本大震災の被災地支援の一環で、観客は原発事故の避難住民。話を持ち込まれた主催の自治体側は大いに乗り気だとか。

◆戸惑うのは東金市側の方だが、一部の不安をよそに、生みの親の観光協会会長、前嶋康夫さんは心を躍らせる。失敗を恐れていたら何もできない。モットーは「みんなで作る観光ごっこ」。新たな試みに横やりを入れられそうになりながら、知名度に欠く東金市の観光客を増やしてきた手腕に県内関係者の評価は高い。

◆子ども時代の「ごっこ遊び」を重ね合わせれば分かるだろう。創造力が培われ、うまくいかない時は話し合う。時に「面白そう」と、仲間の輪が広がったはずだ。創作ミュージカルでも前嶋さんは遊び心の本領を発揮した。将門の出生伝説は各地にいくつもあるが、「手を挙げたもん勝ち」。

◆町おこしは「ないものねだり」でなく「あるもの探し」。ご当地グルメの「B－1グランプリ」を支えるのも遊び心だ。東金市の観光客は年30万人台。胸を張れる数字にほど遠いが、近々「100万人目標」を宣言する。夢を膨らませた観光ごっこで今度は何を探し出すのか。　（山本啓一）